

## 2018年AIで変わる未来

人口知能（AI）の研究や開発が世界で加速している。AIを活用した新たなサービスや製品も続々と登場。コンピューターの大規模な性能向上などが背景にあり、囲碁のトッププロに勝利したりするなど、注目度は高まるばかりだ。AIの進化によって将来的には、自動車の完全自動運転・人間とコミュニケーションでできる各種ロボットの登場・がん治療などの医療の飛躍的な進歩・完全自動翻訳などの実現が期待される。今後数十年のうちに、人々の暮らしや仕事ぶりは劇的に変わるかもしれない。

現在の職業の半数程度はAIが担うことが可能になるとの予想があるほか、いずれはAIが人間の知能を超えることすら現実味を帯び始めている。AIが変える私たちの未来には、どんな世界が待っているのか。

現行の4Gの100倍もの実効速度と、通信の遅れがわずか0.001秒という特徴から、生活や仕事がよりしやすくなると期待される。幅広い企業が5Gを活用したサービス創出に挑んでいる。2018年は商用化に向けた取り組みが加速しそうだ。世界中の情報を整理しアクセス可能にする。そんなミッションを掲げる米グーグルが2018年、設立20年を迎える。検索、地図、動画と多彩なサービスで人々をインターネットに引き寄せ、太い情報の流れを作った。巨大なデータ社会の出現に果たした割合は大きい。

いま、研究開発に注力する人工知能（AI）は、データの価値を極大化する道具だ。「たくさん産業に影響を与える」とシニアフェローのジェフ・ディーン氏。その言葉どおり、自動運転や病気治療などの領域で同社の存在感は増している。日本企業はどうか。18年3月期に営業最高益を更新する見込みのソニー。半導体やゲームが好調なおかげだが、更新まで20年かかった。成長するデジタル分野での日本の足踏みを象徴する。

電子情報技術産業協会（JEITA）機器・サービスの世界市場で10年前に2割を超えていた日本企業のシェアは約1割に縮んでいる。米国発のデジタル化の波にのまれた結果だ。今年を挽回の起点にしたい。ネット空間での争いはグーグルやアマゾン・ドット・コムといった米国製の圧勝だった。しかし、リアル空間を巻き込んだ競争はこれから本番といえる。

新鮮な映像体験ができる拡張現実（AR）と仮想現実（VR）。暮らしや仕事の隅々に自動化をもたらすロボット。そして生み出されたデータを高速通信する5G・アイデアを形にする5G。アイデアを形にする技術には事欠かない。企業はIT感度を高め、発想力を解き放つ時だ

また、データ入力や情報収集などパソコンの定型作業を自動化するソフトウェア「RRA（ロボティング・プロセス・オートメーション）」の需要が伸びている。当初は金融機関など一部企業の導入にとどまっていた。企業は長時間労働の抑制など働

き方改革を求められてるほか、人手不足も重なり、幅広い業界に普及しつつある。

RRAはパソコンにインストールしたソフトウェアロボットだ。一般的には作業の流れを示した命令文を実行し、パソコンのアプリを自動で操作する。ホームページを構成するHTML言語を解析したり、画像認識技術を活用したりして作業を代行する。資材の発注は指定時間にブラウザを起動して注文サイトを開く。次にIDやパスワードを所定のテキストボックスへ入力してログイン。品目や数量を選択して注文ボタンを押す。最後にブラウザを閉じて初期画面に戻す。パソコンの画面には人間と同じ手順が再現される。RPAを活用して業務効率の改善やデータ分析や経理業務の一部を自動化し1か月当たり延べ1万時間以上の労働時間を削減した企業や働き方改革で富士通、ブリジストン、NECなど大企業をはじめ、システム開発会社など人材不足解決の切り札として競争も激しくなりそうだ。